

4. 虚血性心疾患症例と健常者との脈波伝播速度を用いた検討

(第二内科) 新井富夫、富山博史、津田秀一、浅沼亮子、小路 裕、広瀬健一、茂田 博、近森大志郎、山科 章

【目的】 血圧が正常域にコントロールされた虚血性心疾患 (CAD) と健常者 (CON) の脈波伝播速度 (PWV) を、性別、年代別に評価し、PWVの亢進が虚血性心疾患症例と関連があるか否かを検討した。

【方法】 血圧140/90mmHg以下でCADと診断した235例と定期検診にてCONと診断した1873例のPWVを測定した。

【結果】 男性：40歳代 (CAD：1386±240 vs CON：1386±240)、50歳代 (CAD：1511±256 vs CON：1287±155)、60歳代 (CAD：1649±391 vs CON：1372±187)、70歳代 (CAD：1809±639 vs CON：1618±306) とCADがCONに比べ有意に亢進し、女性においても各年代で同様の結果を得た。

【結論】 PWVの亢進が虚血性心疾患症例と関連がある可能性が示唆された。

5. 糖尿病性潰瘍における末梢循環動態の検討Ⅱ

— 加速度脈波を用いて —

(皮膚科学) 柿沼美和、五十嵐 勝、奥田知規、大井綱郎、古賀道之

加速度脈波を用いて糖尿病性潰瘍の末梢循環動態を検討した。健常人A群48例、皮膚病変のない糖尿病B群60例、糖尿病性潰瘍C群40例の3群間で、安静時の加速度脈波b/a値は有意差なく、d/a値はA、B、Cの順で有意に高値であった。Lipo PGE1負荷でb/a値はC群のみ他の2群と異なる反応を示し、d/a値ではA、B、Cの順で大きな変動がみられた。また、年齢、罹病期間及びHbA1cの検討では、潰瘍の有無との関連性はみられなかった。

6. 巨大冠動脈瘤を合併した川崎病の経時的冠動脈造影所見における検討

(小児科学) 塚本真貴子、森 三佳、長谷川大輔、柏木保代、河島尚志、星加明德

巨大冠動脈瘤を合併した川崎病患児の経時的冠動脈造影所見について後方視的検討を行ったので、報告する。

対象は1歳5ヶ月から8歳7ヶ月 (平均3歳4ヶ月) のいずれも男児の4例。川崎病診断基準5項目以上満たすものが2例、4項目以下が2例で全例に冠動脈病変を認めた。

原田のスコアは4~6点 (平均5点)、全例にγ-globlin大量投与・アスピリン投与しており、症例によって抗凝固療法を併用した。初回冠動脈造影は平均第60病日で施行しその後、症例ごとに重症度により3ヶ月~3年の間隔をおいて冠動脈造影を施行した。

結果は進行を認めたもの1例、不変であったもの2例、退縮を認めたもの1例であった。

経過観察中に狭心発作を生じた例もあり、初回の冠動脈造影所見のみで変化を予測することは難しく、経時的な冠動脈造影の必要性を再認した。

7. 大動脈解離例の頸動脈超音波所見

(老年病科学) 阿美宗伯、岩本俊彦、杉山 壮、高崎 優
(外科学第二) 福島洋行、石丸 新

頭蓋外一頸動脈は全身の動脈硬化症を反映するが、大動脈解離における頸動脈病変に関する研究は皆無である。そこで当該例をStanfordの分類に基づいてA群 (n=11) とB群 (n=48) の2群に分類し、これらの頸動脈超音波断層所見を検討した。超音波所見は病変 (plaque、狭窄) の有無、血管径 (左右血管径総和)、血管壁厚について検討した。各群の平均年齢 (63歳) に差はなく、高血圧を有する男性が多かった。頸動脈病変の頻度に差はなかったが、A群の血管径総和はB群より有意に大きかった。以上から、Stanford AとBでは病態が異なることを示唆し、頸動脈の拡張例では大動脈瘤ばかりでなく大動脈解離を合併する可能性が高いと考えられた。